

助け合う仲間と共に

志学小学校 五年 松尾 珠徳

春になると、三瓶の町のいたる所で、草原が広がるのを知っていますか。これは、牧草地です。この牧草が、牛のエサになるのです。ぼくの家も、牧草地を十か所以上持つています。広い所は、志学小の校庭三個分の広さがあります。この広さの牧草を、家族だけで刈り取るのは、とても大変なことです。そこで、近くの酪農家が協力して、それぞれの家で、草をみんな刈り取っていきます。力を合わせることで、刈り取りができます。

刈り取った牧草は、サイレージという口入れにします。家の敷地にたくさん積み重ねていく白や黒のサイレージは、大きなサイコロのようです。小さい時から、登ったり、かくれんぼをしたりと、ぼくにとつて、楽しい遊び場でした。これがいさだかなんて、思ってもいませんでした。分かってから、ただの固まりだし、巻いていけば簡単

にできる物だと思っ
ていました。

そんな時、トラクタに乗せてもらう機会
があり、刈り取りを高い所から見ました。牧
草地から何も無くなっ
ていく感動。まるで空
想の世界みたいで、ワクワクしたのを覚えて
います。この時初めて、たくさんの仲間で作
業をしていることも知りました。また、自分
の手で、サイレージを作ったことも心に残っ
ています。ボタンを押すと、機械が大きな音
で動き出し、牧草の固まりが黒く巻かれてい

きました。ぼくが押したことで出来上がった
と思うと、嬉しくてたまりませんでした。こ
の時から、サイレージに興味をもつようにな
り、サイレージを作る大変さも学びました。

草入れの時期はとても忙しく、父や祖父は
一日中、休けい時間がありません。それでも、
みんなが自分の家以外の仕事も行っていきます。
機械のトラブルや、難産の時等、連絡をする
と、すぐかけつけてくれます。夜遅くても、
必ずだれかが来てくれます。みんなが仲間の

ことを思っているんだな。一人では、この仕事はできません。仲間がいるからこそ、酪農は続いていくのだと思います。祖父や父が黙々と取り組む姿や、仲間と助け合う姿を見ていると、ほくも父達のように、人と人とのつながりを大切にできる大人になりたいと思っようになりました。この姿は、大人になってもずっと忘れなれりと思ひます。家の手伝いはつらい事も多く、面どうでした。たくさんマイナス言葉も言ってきました。でも、今ほくは、牛飼いの家に生まれて良かったと思っています。仲間の大切さを教えてもらい、普通ではできない体験がたくさんできたからです。祖父が始めたこの仕事を、ほくが受けついでいきたいと感じるようになりました。大きな口シルヤ、牧草を積んだトラックがこれからも三瓶の町を走ります。仲間と共につくり上げた大切な物を運んでいます。見かけたら、酪農家さんたちががんばっているんだなと、ぜひ応援してくださーい。